

いきもの記

Vol.130 2025.1.22

1年1組 千葉 美文
みづみ
 (科学研部生物化学班・鳥研究)

都会の公園でもこれだけの猛禽がいる 猿江公園の越冬猛禽類

年が明けたので、私のいきもの記も新年らしい話題にしよう。読者諸君は初夢で見ると縁起が良い3つの物を知っているだろうか。それは、富士山と鷹(タカ)とナスである。一富士二鷹三なすびと呼ばれることで有名だ。ということで、今回のいきもの記は鷹、猿江公園に越冬しに来るハイタカとノスリについて書いていこうと思う。

ハイタカは、ユーラシア大陸とその周辺に広く生息する小型のタカで、私の好きな鳥であるツミの近縁種だ。ヨーロッパでは都市で繁殖するものもいるが、日本では都市で見るとはオオタカやツミに比べて少ない。近所の水元公園では毎年越冬しているが、いつも遠くにおいてなかなかじっくり観察できない。なので、ハイタカを近くでよく観察すること(できれば繁殖を観察すること)が私の夢の一つでもあった。本校に入学して鳥班に入り、ハルアキ先輩から「猿江公園でハイタカが毎年2羽ぐらい越冬する」と聞いたときはとても驚いた。2024年12月の下旬、登校前にアオジを観察していたとき、ふと横を見上げたら、なんとそこにハイタカがいた。最初は大きく見えたのでオオタカかと思った。感動と共にシャッターを切ったあと、改めてその近さに驚いた。私とハイタカの距離はわずか5~10mほどだった。これほど狭くて都会の公園でハイタカが毎年あの距離で見れるのはすごい。江東区民はもっと誇りに思った方がよいと思う。

ノスリとの出会いも衝撃的だった。2025年1月6日にノスリがいたと、猿江公園のサービスセンターのサイトウさんが龍平先生経由で教えてくださり(ありがとうございます!)、その2日後に見ることができた。最初は本校の廊下の窓から、ノスリがカラスに追いかけているのを見て「本当にいるー!!」と思いながら走って猿江公園に向かい、観察した。ノスリも水元公園と比べて信じられないくらいの至近距離だった。私だけでなく鳥班は全員、ノスリが来るとは全く予想していなかったのととても驚き、感動した。しかし、このまま越冬してくれるかなと思った矢先、また本校の廊下の窓から見えたノスリは、5羽ほどのカラスに囲まれ、公園から離れた場所に追い出されていた。1月10日のことである。その翌日、猿江公園に行くともうノスリの姿はなかった。カラスは猛禽類が都市で生きる上で最大の障壁なのだと改めて思った。

話は変わるが、ノスリの名前の由来をクイズとして母に出した時、母は「野に放たれたスリ」と答えた。正しくは、「野を擦るように飛ぶから」なのだが、スリというのはあながち間違いではなく、よくオオタカの獲物を横取りする。なぜオオタカには強圧的な態度なのに、カラスにそれができないのだろうか。最後に、ハルアキ先輩は「猛禽も近くで見られるのが猿江の魅力」と言っていたが、私もそう思う。読者諸君もぜひ、都市の猛禽類を見るのに猿江公園へ行ってはどうだろうか。都市の猛禽類を見ると、特別感があってとても楽しいのでお勧めである。都市の猛禽類を観察して、自然環境への理解を深めていただけるととてもありがたい。



ハイタカ メス成鳥 (12月25日 猿江恩賜公園)
 この個体はかなり大きい個体だったようで最初はオオタカかと思った。



ノスリ 幼鳥 (1月8日 猿江恩賜公園)
 ノスリの成鳥は目が黒いが幼鳥は目が黄色い。幼鳥なので良い越冬地は他の個体にとられて、猿江公園に来たのかもしれない